園長通信～こころ～ №７３

大将軍

2024.7.19

いつもは５階の駐車場に置くことができていた。ところが、５階には満車の表示が出ていた。６階に上がった。また、満車だった。７階に上がった。またまた満車だった。ようやく８階の駐車場に車を置くことができた。こんなことは初めてだった。エレベーターで５階まで下りた。フロアに行ってみると、人が溢れていた。福島に、こんなにも人がいたのか。「キングダム」のせいなのか。半信半疑だった。

「キングダム 大将軍の帰還」が公開となった。考えた。すぐに見に行くか。楽しみをとっておくか。天気予報を見た。幸か不幸か雨だった。これは行くしかない。すぐにチケットを予約した。

今回がシリーズ４作目となる。１作目から３作目までは、もちろんすべて観た。今回の公開に合わせてテレビでも放映された。まんまと術中にはまり見てしまった。原作のコミック本は、何度も読んでいる。読み返さないと、ストーリーがわからなくなってしまう。７０巻以上出ているが、映画では、まだまだ話の序盤である。その序盤における最大の山場が、今回の４作目にあたる。ここでは、大沢たかお演じる王騎将軍の最期が描かれる。

終わってから、すぐにもう一度観たいと思ったのは、「トップガン マーヴェリック」以来である。この作品は、“追いトップガン”という言葉ができるほど、何度も映画館に足を運ぶ人が出た。過去３作品もいいのだが、今回の「キングダム 大将軍の帰還」は特にいい。私と同じように、また観たいと思う人は多いはずである。

観る人に、なぜそう思わせるのか。一番は、王騎将軍の魅力ではなかろうか。すなわち、それを演じる大沢たかおの演技力である。主人公の信は、天下の大将軍に憧れ、それを目指す。その過程で出会い、大きな影響を受けるのが王騎将軍である。王騎将軍は、天下の大将軍を体現してきた人物である。その威厳とすごさは、観る者を圧倒し、魅了する。

死期が迫った王騎将軍は、信に大きなメッセージを託す。そして、最後には自分の矛も預ける。まさにキングダム序盤のクライマックスである。百人将となった信の部隊に、飛信隊と名づけたのも王騎将軍である。この後、主人公の信は、戦うたびに武功を上げ、将軍への道を突き進むことになる。

世の中には、繰り返し見たり読んだりするタイプの人がいる。そういった人には、愛読書というものがあるのだろう。私はというと、何でも一度で終わりである。繰り返しということがない。結局、「トップガン マーヴェリック」もそうだった、追いトップガンにはなれずに終わった。

だが、今回は違うような気がする。きっと１か月後くらいに、また映画館に行くような気がしてならない。それほどに、今回の「キングダム」はよかった。早速、コミック本を読み、映画のストーリーを詳しく復習したのは言うまでもない。